韓国の病院見聞記（シーズンⅡ－③）

赤十字病院がある韓国
― ソウル赤十字病院 ―

金城大学　社会福祉学部
社会福祉学科　教授
福永 肇
Hajime Fukunaga

■珍しい赤十字社の病院

ソウルで赤十字病院を見学させて頂いた。赤十字社（および赤新月社）は一国一社で世界に186社ある。その中で韓国の大韓赤十字社は珍しく「病院」を保有・運営している赤十字社である。日本人にとっては「赤十字病院」の存在は当たり前で、疑問や違和感は全く持たない。事実日本では全国各地に「日赤病院」と呼ばれる赤十字社の病院が91もあり、巨大病院グループの一つとして存在している。しかし赤十字社の病院は、日本では常識であったとしても、世界ではそうではない。赤十字社が病院を保有して運営している国はかなり稀で珍しい。日本人はそのことを正確に認識しておく必要がありそうだ。

現在、日本、韓国、北朝鮮、台湾、中国には赤十字病院がある。南アフリカのケープタウンにも赤十字病院（Red Cross War Memorial Children's Hospital）が1つある。しかしそれ以外の国での赤十字病院を私は知らない。昔はどうであったのだろうか。野戦病院は別として、私の知る限りでは奉天（現在の瀋陽）やニューヨーク、ストックホルム、パリには赤十字病院があったようだ。日露戦争時の1905年、日本陸軍は奉天にあった5つのロシア赤十字病院を接収している（責任者は森林太郎軍医監＝森鴎外）。ニューヨークの赤十字病院は1893年の開院である。その後合併や再編があり、1948年以降はニューヨーク大学病院になっている。ストックホルムでは赤十字看護学校があったサバッツバーグ総合病院の南館（女性専用病棟）が、1929年に看護師育成目的の赤十字病院として独立した。この病院は1994年に廃院となり、建物は現在赤十字看護大学の本部になっている。第一次世界大戦中の1915年に、日本赤十字社はパリに「フランス陸軍直轄第4厚誼病院」という名称の病院を開設している。場所はアストリアホテル内、目的は負傷兵の救護で、日本赤十字社が派遣した医師、看護婦が2年余の間、病院の運営、医療を行った。

多くの国にとって赤十字社への期待は、紛争や災害時の負傷者救援や戦争捕虜への人道的支援にあるようだ。病院経営は珍しい。赤十字社には活動の7原則があるが、「医療機関の運営」に関しては特段の記載がない（病院事業は平時の医療保健活動と解釈されるのであろう）。また赤十字社が看護師の育成をするのも世界の常識ではなく、一部の国での話である。しかし東アジアの一部地域（と南アフリカ）にのみ赤十字病院が分布しているという事実は、実に面白い。それはどうしてなのだろうか。

私は日本や韓国、北朝鮮、台湾、中国といった東アジアに赤十字社の病院があるのは、日本赤十字社の創設時の事情によると考えている。赤十字社の7原則の中の2つは①戦地や紛争地では友軍敵軍どちらにも与しない、②政府の圧力に屈さず、また活動への干渉を許さない、受けるのは補助のみ、である。しかし日本赤十字社は陸軍省に後援されて生まれ、育てられたという生い立ちとなった（戦前の日赤病院の管轄官庁は医療を担当する内務省ではなく、宮内省と陸軍省、海軍省）。陸軍は負傷兵を救護する看護者が必要であった。そのニーズに応えるために博愛社（日本赤十字社の前身）は常設病院を持つという発想をし、1887年（明治19年）に宮内庁敷地内に病院を開設した（現在は広尾の「日本赤十字社医療センター」）。病院の目的は軍用看護者教育と傷病兵収容である。日本赤十字社は国内だけでなく、東アジアでの日本の侵攻地にも病院を展開していった。これが現在の世界地図において東アジアの一部地域に赤十字病院が分布している理由である。太平洋戦争中、日本の赤十字病院はすべて陸軍病院に編入され外地から帰還して来る傷病兵の収容施設になった。大阪、広島、富山の日赤病院は、例えば「大阪陸軍病院赤十字病院」という病院名に改称している。話は変わって、日本の地図製作は明治20年代にドイツの地図作成を手本に陸軍参謀本部で始まった。「病院」の記号は旧日本陸軍衛生隊の印⊕を図式化したものである。この記号がいつ採用されたかは不明であるが、陸軍と日本赤十字社とは緊密であったこと示しているのかもしれない。1945年に日本を占領したGHQは陸軍・海軍を解散させた。しかし赤十字病院の処置に困った。アメリカ赤十字社の意見も参考にして、軍隊病院からの完全脱却を条件に日本赤十字社の病院存続を許した。

朝鮮半島の赤十字社は紆余曲折を経た歴史となっている。朝鮮王朝は1897年に国号を「大韓帝国」に改め、10年後の1906年に「大韓赤十字社（Korean Red Cross）」が設立された。大韓赤十字社は1910年の日韓併合により、「日本赤十字社朝鮮支部」に再編される。独立運動活動家が結成した上海の大韓民国臨時政府に「韓国赤十字社」が創設されたが、やがて消滅。日本の敗戦・撤退後、朝鮮半島はソ連とアメリカに占領され軍政下に置かれた。1948年に南と北の別々の国として独立。1950年からの朝鮮戦争の大混乱を経て、一国一赤十字社の原則から南に「大韓赤十字社（Republic of Korea National Red Cross：Korean Red Cross）」、北に「朝鮮紅十字社（The Democratic People's Republic of Korea Red Cross Society：The North Red Cross）」が発足し、今日に至っている。現在の大韓赤十字社は本部の下に6病院（ソウル、仁川（インチョン）、尚州（サンジュ）、総営（トンヨン）、居昌（コチョン）、京仁（キョウイン））、14支社、131献血センターを擁す。かつては病院16、病院船2を運営していた。その後病院は減少してきており、現在は上述の6病院となっている。病院規模はソウルが288床、仁川は205床で、後の4病院はそれよりも小さい模様である。韓国の赤十字病院は、政府補助金は少なく、納税義務もあり、病院経営では苦労しているようだ。大韓赤十字社の詳細ついては「世界の病院からNo. 26：韓国の赤十字社」を参照頂きたい。

■ソウル赤十字病院

1905年に最初の赤十字病院である「大韓国赤十字病院」がソウル西門外のテドン（大洞）に開設された。小振りの瓦葺き平屋の病院だった。この病院は1907年に医学校や廣濟院と合体再編されて「大韓医院」になった。現在のソウル大学病院である。1910年の日韓併合によって大韓赤十字社は日本赤十字社朝鮮支部に再編された。1926年にソウル西大門区に「日本赤十字病院」が開設され、1942年に「京城赤十字病院」に改称される。京城とは現在のソウルのことだ。この病院は太平洋戦争中の朝鮮で最大の病院であったようだ。この病院が現在の「ソウル赤十字病院」である。是非この病院を見学したいと思った。今回の韓国の病院見学をご手配くださったハニャン（漢陽）大学のS教授にソウル赤十字病院の見学をお願いし、見学が実現した。残念ながら病院長は日本に出張中であったが、副病院長から病院の案内を頂けた。

副病院長の説明は以下であった。病院開設は（1926年ではなく）1905年で112年の歴史。病床数は288床で外来患者数は1日800～900人。医師は36名。医師や看護師、医療スタッフの人員確保への心配は無いそうだ。四大疾患を診る病院である。また地域拠点公共病院で、社会的立場の弱い患者、たとえば高齢者、貧困者、脱北者なども受け入れている病院である。医療費支払いが困難な患者には140万ウォン（約14万円）の上限はあるが、無料で対応することもできる（篤志家の後援者がいる）。診療報酬は（ソウルの大病院は定額制から離脱している中で）ソウル赤十字病院は包括点数を適用している。ソウル大学などの大病院と比較するとソウル赤十字病院が提供出来ている医療の質は、確かに差がある。例えば大学病院の平均在院日数は5～6日であるのに対しソウル赤十字病院は12～15日となっている。しかし医療スタッフの質に差はないと考えていると副病院長は力を込めて付け加えた。経営では2014年に大変な時期があったそうだが、それ以降黒字が出始めたそうだ。スタッフは若い人に変わり、設備も最先端になった。国からの補助金は設備施設にはあるが、経営に関わる部分にはない。大韓赤十字社は非営利ではあるが、税法上では営利組織とされ、税金も納税する。免税項目は少ない。税に関しては、公的医療機関の指定を受けて非課税である日本赤十字病院の経営基盤とは根本的に違っていた。韓国の赤十字病院は15年前に15病院があり、9つのすべての道（日本の政令指定都市を除いた後の都道府県に相当）にあった。しかし経営難になり、現在は6つになっている。以上が副病院長の病院説明であった。

このソウル赤十字病院は「世界の病院からNo.43」の「病院の葬儀場経営」にて登場した病院である。韓国では大病院が病院建物の地下とか病院に隣接して葬儀場を開設し、運営している。仏さまはその病院で亡くなった方に限っていない。というか、お葬式は大病院の葬儀場で行う社会になってきている。病院は終末ケアに留まらず言葉通り“from the cradle to the grave（揺籃から墓場まで）”へのサービス対応をしている。病院サービスに対してのこのパラダイムシフトはなんとも凄い。

写真1：ソウル赤十字病院。4階建ての旧館と11階建ての新館（共に地下1階）、新館の後ろに隣接する葬儀場、立体駐車場で構成される。旧館の建物のcornerstone（礎石）は1986年であった。31年前の建物になる。第二次世界大戦中は朝鮮半島で最も大きい病院であった。

写真2：ソウル赤十字病院、病棟（新館）建物。

写真3：玄関まわり。右側の柱には、第三者評価認証、国立ソウル大学臨床研修病院、ヨンセ（延世）大学医学部臨床研修病院のプレートが病院の誇りとして掲げられている（写真4、5も参照）。

写真4：第三者評価認証プレート。韓国の多くの病院の玄関に掲示されていた。4年間の認証期間とともに「医療の質」「患者の安全」と英語で書かれている。病院に求められる最大の2項目である。

写真5：国立ソウル大学臨床研修病院を示すプレート。日本の病院でも病院玄関やホームページに「臨床研修病院」の表記がある。しかし日本の臨床研修はマッチング方式で、韓国の病院のように大学医学部との個別契約による「〇〇大学の教育病院」というシステムではない。

■ソウル赤十字病院で見られた韓国独特の院内風景

限られた旅程の中で韓国の病院を出来る限り見学した。どの病院も、サイズ、ハード、ソフト、院内雰囲気などが日本の病院に実によく似ていた。院内で見かける患者や病院スタッフの容姿や服装も日本人によく似ていた（ただし韓国は美男美人国だ）。韓国と日本の病院は似たもの同士といえる。一番の相違は、韓国の病院が葬儀場を運営していることである。それ以外で目につく病院の相違は院内の表示文字がハングル文字か、漢字&カタカナか、くらいであろうか。しかし注意して観ると随所に韓国独特の医療文化が発見された。インテリアや物品の色使いはたしかに違う。今回の「世界の病院から」では、ソウル赤十字病院にて発見した韓国の病院文化を、写真を通じて紹介してみたい。

≪①病院のキャラクター≫

最初に、ソウル赤十字病院のキャラクターを紹介したい。主役キャラクターは注射器、ドクター、ナースの3人だ（写真6）。病院副病院長はこのキャラクターを誇らしげに紹介し、感想を聞かれた（返答に困った）。医師は腕を腰に当てており、力強い。紙カルテを胸に抱いた看護師の笑顔がすごい。ゆるキャラではない。医師の額帯鏡は懐かしい。昔は白衣と聴診器と額帯鏡が医師のシンボルだった。最近の耳鼻咽喉科の医師は無影灯とペンライトを使っている。写真1にもキャラクター3人の姿が入口と建物の2か所に見られる。病院が独自のキャラクターを創り、前面に売り出している。そのポジティブ行動は日本の病院が学ぶ点であろう。

写真6：ソウル赤十字病院のキャラクター人形。左から注射器、ドクター、ナース。

写真7：病院グッズ。病院から頂いたマグカップ。

病院からキャラクターがプリントされたマグカップを来院の記念品として頂いた。マグカップには3人に加え体温計とカプセル薬のキャラクターも描かれていた（写真7）。2年少し前にソウルアサン病院を訪問したときには、箱入りの病院名入り高級ボールペンや病院特製USBメモリを来院記念品として頂いたことがある。病院に来院記念品という物品があることに驚いた。来院記念品はどうも韓国医療での文化のようだ。

日本の病院でもリクルートで看護学生に配る病院名入りのクリアファイルやボールペンはある。しかし本格的な「病院グッズ」を私は東大病院以外で見たことはない（東大病院の大学生協の売店には病院名入りのクッキー缶が販売されていた）。米国のメイヨ―クリニックの院内ショッピングモールには“MAYO　CLINIC”のロゴマーク入りのグッズ（Tシャツ、カバン、ネクタイ、文具品など）が品数多く揃えられ、販売されていた。

余談だが、日本の病院にはキャラクターはいないのか、と調べてみると、若干ながらも事例があった。国立病院機構でも長崎医療センターや天竜病院（静岡県浜松市）、広島西医療センターにはその病院独自の「ゆるキャラ」の着ぐるみがいた。また日本赤十字社にも公式キャラクターの「ハートラちゃん」が2014年からいた。ハートランドの森に住んでいた森の精で「苦しんでいる人を救いたい」という強い思いでやって来た。好きな食べ物はハート形のさくらんぼが好みという設定だ。デザイナー会社がどこなのかは、すぐに察しがつく。しかし私は日赤病院でこの赤縞のトラを見た記憶はない。

写真8：日本赤十字社の公式マスコットキャラクター「ハートラちゃん」（日本赤十字社HPより http://www.jrc.or.jp/information/140508_001961.html）